



ボランティアの皆さんのおかげ
 で多くの困り事を支援することができました。しかしその一方で、困っている人のニーズの掘り起こしも課題です。ボランティアセンターについてはチラシやホームページ、民生委員の皆さんなどを通じてお知らせしましたが、情報に気づけない人もいます。また、知っていても「一人に迷惑はかけられない」「自分でやらねば」と頑張りが過ぎてしまう人もいます。

士¹の結びつきが「お隣さん大丈夫かな」という声掛けにつながります。家族が近くにいない人も、周りに知人が増えればホッとできる場面が増え、安心につながります。

ボランティアを利用した人からは、「誰かと話すことで気持ちが明るくなった」「二人じゃ何もする気にならなかつたけど、ボランティアの人が来てくれたおかげで片付ける気力ができた」という声もよくありました。

現在、災害ボランティアセンターは閉所し、生活復興支援ボランティアセンターになりました。登録ボランティアの皆さんの助けを



市社会福祉協議会
 なるせ 成瀬 裕二事務局長
 生活復興支援
 ボランティアセンター
 須屋2251-1(ふれあい館内)
 ☎242-7007

借りて、引き続き住民の皆さんを支援します。

できることは自分で。でも、一人では難しいとき、辛くて気持ちがふさがってしまったときは、ぜひ声を上げてほしい。余裕ができた人は、周りに困っている人がいたら手を差し伸べたり、当センターに情報提供したりしてほしいです。

今、あなたにできることは何ですか。

今回の特集で紹介した人・団体の活動はほんの一部です。このほかにも、市内外で支援活動に携わった人・団体が数多くあります。皆さんの温かいご支援とご協力、本当にありがとうございます。



大きな避難所の清掃に、小・中・高校生を含む約40人が参加。市ふるさと大使・谷山佳菜子さん(写真⑪左)も大阪から駆け付け、「少しでも力になりたい」と清掃やがれき撤去に加わった。

誰かの
 力になりたい



職業を活かして避難所で整体を施した吉井治さん(新開)。「避難所生活のストレスや緊張は想像を絶する。心と体を少しでもほぐしたい」と自宅の片付けも後後に、仕事後毎日駆け付けた。



みんなに
 笑顔に
 なってほしい

避難所で足つぼマッサージを行なった川上昌宏さん(熊本市北区)。「4年前の九州北部豪雨で多くの人に助けられた。復興にはマンパワーがいる。今度は自分にできることをしたい」と参加した。

左から齊藤咲良さん(御代志)と渡邊笑奈さん(みずき台)。齋藤さんはツイッターでボランティア募集を知り、高校の寮から戻って友人らとボランティアに参加。避難所での何気ない会話や笑顔での交流は、ストレスで疲れた避難者の心を和ませた。



**災害
 ボランティアセンター**

発災から約1週間が経った4月22日、市社会福祉協議会は災害ボランティアセンターを発足させた。立ち上げの数日から、支援を必要とする人のニーズ把握や準備を行い、ボランティアを募った。

5月14日までの活動で、市内外の個人や企業からの応援など、延べ973人のボランティアが参加した。自分たちだけでは片付けが困難な世帯を訪問し、がれき撤去や清掃など計220件を支援。オレンジのビブスを着た8〜76歳のボランティアが市内を駆け回った。



避難所を片付ける女子高校生たち。渡邊真帆さん(上須屋・写真⑧右)は自身の避難先・ふれあい館から友人らに呼び掛けて参加。避難所での幼児の見守りや清掃、復興メッセージボードの作製を行ない「自分にもできることがあるんだな」と感じた。



割れた食器やがれきを片付け自分のトラックで搬出した浦野聡さん(若原・写真⑥右)。吉良健志さん(須屋・写真左)は自衛官だったころの経験を生かして活動。(写真中央右から)中西恵莉さん(須屋)と高田美由紀さん(みずき台)も地元の復興に役立ちたいと参加した。



歯科衛生士の曾田玲子さん(上須屋・写真⑨左)と渡邊仁美さん(熊本市北区・写真⑩右)。子どもや高齢者を中心に、避難所生活でおそろそそになりがちな口腔ケアの大切さを伝えた。



「見る人の心が少しでも和めば」と今秋侯治さん(群)と中村健さん(ユトリック団地)がふれあい館に設置したこいのぼり。これも一つのボランティアの形。



②センターの開設準備③がれき撤去④大型家具を立て直す様子。学生ボランティアも全体の半数ほどいた。

日常の風景を
 取り戻したい



同じく大変な思いをした
 市内の人たちが協力
 胸が熱くなりました
 さかぐち 坂口 幹子さん(大池)

家の片付けは自分では思っていたのですが、一人暮らしで男手もなく、割れた大量の瓦には本当に困り果てていました。遠く県外にいる息子夫婦がボランティアセンターに連絡してくれました。瓦やがれきの撤去、倒れた家具や物置きを立て直し、テレビの配線のし直しなど、本当に助かりました。ボランティアの皆さんが私と同じく被災したはずの合志市民ということも、ありがたくて胸が熱くなりました。

また、近所で困っていた人が、この活動を見てボランティアセンターを知り、利用にもつながりました。



大型家具の運びだし
 などがあつという間
 本当に感謝しています
 きなが けんいち 木永 健一さん(上庄)

足が不自由で、特に自宅2階の片付けに手間取っていました。地元の民生委員さんを通じて2日間で計12人のボランティアの方が駆け付けてくれました。熊本高専の学生など若い人も多く、たんすやステレオなどの大型家具、崩れた大量のブロック塀をあつという間に運び出してくれました。

はがれた壁・割れたガラス・倒れた家具で足を踏み入れることさえできなかった部屋。夫婦二人では何日かかるか分かりませんが、皆さんのおかげで片付けられました。微力ながら、今度は私も何かできることをしていきたいです。